

トビカン
ケンチク
ツアー

私に代わって
とびラーが
ご案内します

アート・コミュニケーター
とびラーによる
オリジナルのツアーで都美を散策。
建築ツアー

トビカンでは、アート・コミュニケーター（愛称：とびラー）による「建築ツアー」を開催しています。とびラーが選んだトビカンの見どころを一緒にめぐってみませんか？

QRコード
詳細・申込みはこちら



東京都美術館 × 東京藝術大学「とびらプロジェクト」とは？

「とびらプロジェクト」とは、美術館を拠点にアートを紹介してコミュニティを育むソーシャルデザインプロジェクトです。東京都美術館がリニューアルオープンしたことをきっかけに、隣の東京藝術大学と手を組み2012年にスタートしました。広く一般から集まったアート・コミュニケーター「とびラー」と、学芸員や大学の教員、そして第一線で活躍中の専門家がともに、そこにある文化資源を活かしながら、人と作品、人と人、人と場所をつなぐ活動を展開しています。このマップもとびラーの活動の一環から生まれました！



とびらプロジェクト 検索

<https://tobira-project.info>



15か国語で公開中！

Map of Tobikan's Highlights



トビカン みどころ マップ



ご来館いただいたみなさま、
展覧会だけを見て、そのまま帰るのはもったいないですよ。
このマップを手に「東京都美術館(愛称:トビカン)」を
ゆっくりと散策してみませんか？



あなたは今「トビカン」という名のアートの上にあります

まえかわくにお
東京都美術館を設計した前川國男は、日本を代表する20世紀の建築家の1人です。
1960年代以降、多くの美術館、博物館の設計を手がけました。
そのひとつひとつが珠玉のアートであり、そこには前川好みの建築スタイルがあります。

ワクワクさせる入口までのアプローチ

緑の森を抜け敷地に足を踏み入ると、突然地下に誘導したり、ジグザグと回り道をさせたり、美術館への入口までのワクワク感を醸し出します。

人が出会える美術館

美術館をひとつの都市空間として捉え、人が出会ったり、自由に行き来できたりする広場(中庭:エスプラナード)こそが都市の中心であるべきだと考えました。

グルメな前川國男

「美術館に来て美味しいものが食べられないなんてあり得ない。」と言っていたグルメな前川。トビカンでは正面にレストランを配置しています。

連続空間が織りなす建物の動き

同じ形の建物を通路でつないだり、ずらしたりして、建物に動きや変化を取り入れています。公募展示室は同じ形の建物が4棟くっつきあいながら、少しずつずれて建っています。

素材へのこだわり

「平凡な素材によって、非凡な結果を創出する。」と言った前川。トビカンでは、手間のかかる打ち込みタイルなどを取り入れることによって、とても落ち着いた趣ある建物に仕上がっています。

風景にとけ込むたたずまい

建物の約60%を地下に埋めこみ、高さを低く抑え建物を周りの風景と調和させています。トビカンは上野の柱にしっかりと溶け込んでいます。

東京都美術館概要

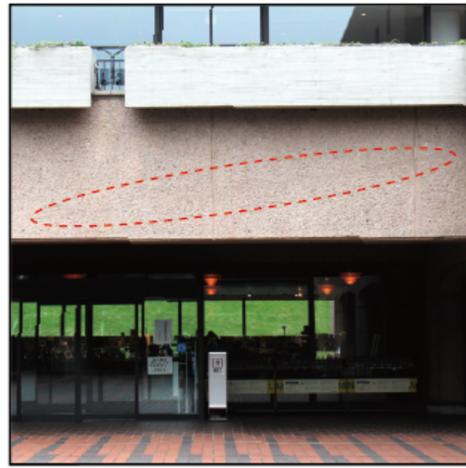
1926年東京府美術館として開館(岡田信一郎設計)。老朽化により1972年新館の工事に着工、竣工は1975年3月。設計は前川國男。敷地面積約12,000㎡、地下3階地上2階、外壁は焼きレンガ色の打込みタイル工法。2010年改修工事に着工、2012年竣工し、リニューアル・オープン。





1 彫刻空間

上野の杜を背景に野外彫刻がお迎えます。周りの風景を映し出すステンレスの球体《my sky hole 85-2 光と影》や、魅惑的なタイトルの《メビウスの立方体》、《P3824 M君までの距離》など、10作品をお楽しみください。



2 エントランスに残る「時代の傷」

建物の顔である正面入口に残る一筋の線は、1974年のオイルショックの名残。継ぎ足すコンクリートが間に合わず、最初に流し込んだ分が先に固まってしまったためできたもの。謝る担当者に前川は「アルプスの山々を見ているようです。」と、さらっと返したとか。



3 はつりコンクリート

正面のエスカレーターを降りると、重厚なアーチが目を引きまます。表面のざらざらとした質感は、固まったコンクリートの表面をノミなどで叩いて削る「斫(はつり)加工」によるもの。これは職人の手作業です。光の当たり方によって豊かな表情を見せてくれます。



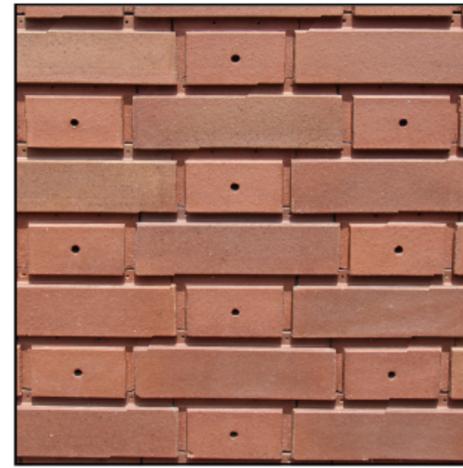
4 トビカンのトンビ

中庭には前川が「トンビ」と呼んだY字型の手すりが並びます。シンプルで軽快なデザインは、揺れを吸収し全体を安定させる安全面でも優れモノ。素材の赤茶けたコルテン鋼は「時間に耐える建築」を目指した前川の好みで、錆までも美しいと言われています。



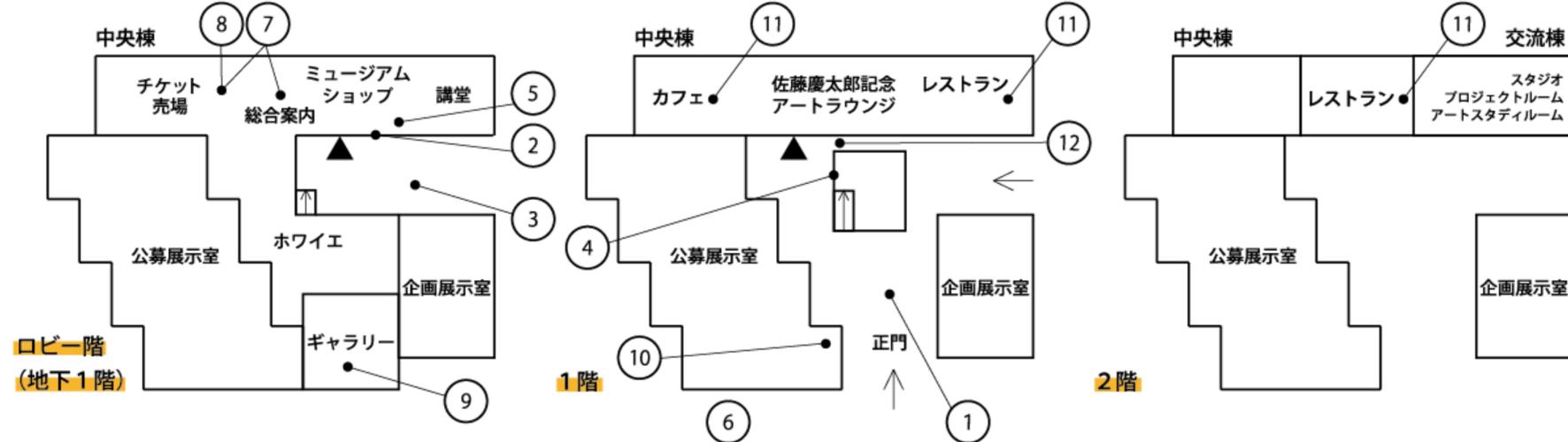
5 かまぼこ天井

館内各所で見られる、かまぼこ(ヴォールト)天井は、フックが付いた鉄骨の骨組みに、短冊状のパネルをつりさげて固定する工法で作られています。温かみのあるピンク色はインド砂岩によるもの。やわらかく落ち着いた空間を演出します。



6 実は『穴』場です！

レンガのように見える外壁は、タイルです。真ん中に穴のあいているものもあります。よく見ると溝の部分には二つずつ、小さな穴が。この大小の穴は前川こだわりの「打込みタイル」工法に不可欠なものです。見た目のアクセントにもなるよう配置されています。



7 そこにも、ここにもおむすび型

ロビー階中央の階段を見上げるとおむすび型、総合案内のテーブルもおむすび型、そして「佐藤慶太郎記念 アートラウンジ」のテーブルもこれまたおむすび型。おむすび型は、前川建築のモチーフの一つ。おむすび型はほかにもあるかも。見つけてみませんか。

8 なめらかな手すり

階段の手すりは、角がとられ、緩やかなカーブを描いています。これは柔らかな手触りと和服のたもとを慮(おもんば)かってデザインした前川の細やかな精神を今に引き継いだものです。木のブロックから切り出した美しい木目にも注目です。

9 降り注ぐ光

ギャラリーは1975年当時の床タイル、アーチ天井など、前川独特の手法がちりばめられています。大きな窓のカーテンが開くと外光が柔らかくギャラリー内に降り注ぎます。そこから見える外の風景が一枚の絵のよう。春は桜の姿を眺めることもできます。

10 むかしも いまも

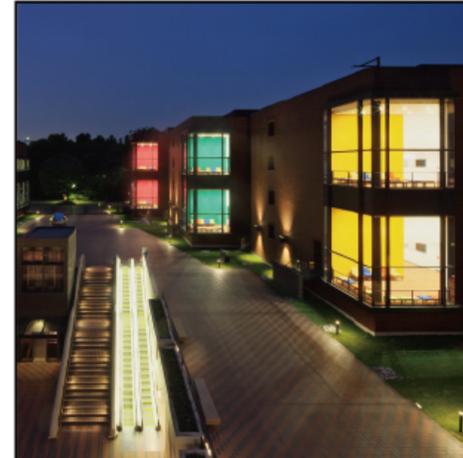
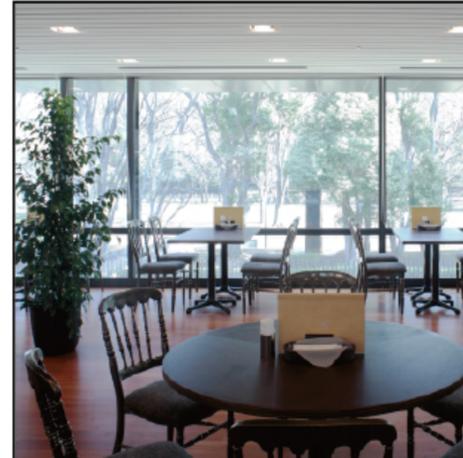
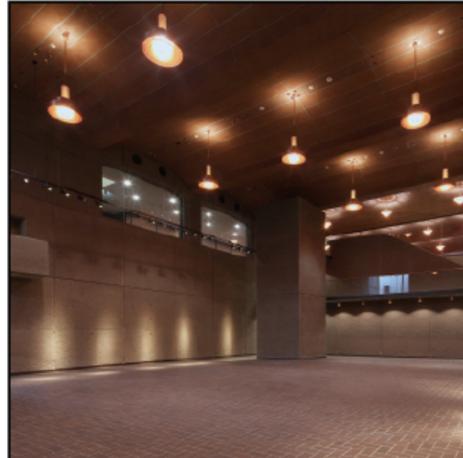
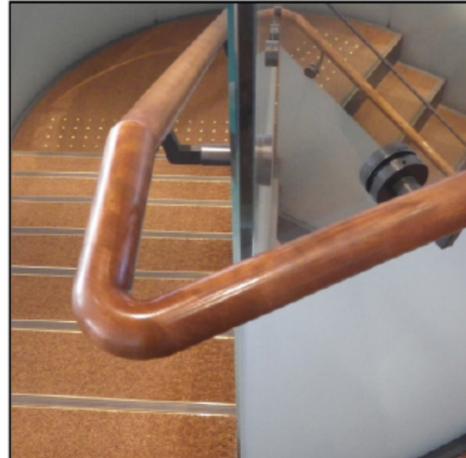
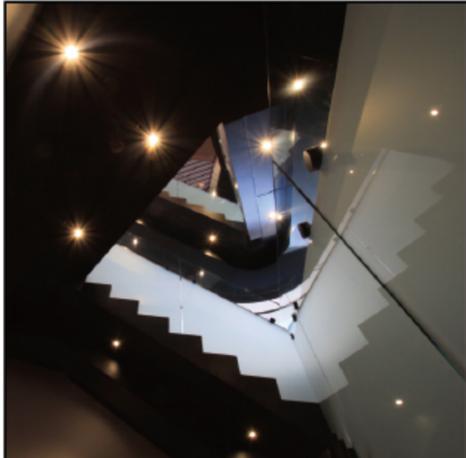
カラフルな色の椅子やスツールが、館内のあちこちに置かれています。2012年のリニューアルでは、残されていた色見本を元に座面の張替えをしました。椅子の脚も継ぎ足して、より座り心地も良くなりました。こちらは公募展示室の休憩スペースです。

11 美術館を味わおう！

トビカンを訪れる楽しみの一つがスタイリッシュなレストラン。グルメで知られた前川らしく館の中央に置かれました。現在、カフェを含め3店あります。1Fのレストランでは、コース料理がいただけます。カフェも1Fにあります。2Fでは眺めのよい窓際席がおすすめ。

12 トビカンの夕景

日没が近づくと、赤、青、黄、緑の壁が夕間に浮かび上がり、見る人を温かく、落ち着いた気持ちにしてくれます。立つ位置によって、見える壁の色も異なります。この景色を開館時間内に見られるのは、日暮れ前のほんの短い時間だけです。



トビカンのタイルのひみつ（解説編）

トビカンは、上野公園の緑の中に佇む、レンガ色の外観が印象的な建物です。

レンガのように見える外壁は、実はタイルです。

炆器（せっき）質の釉（うわぐすり）のかかっていない焼き物で、分厚く、目地部分まで一体になった複雑な形をしているタイル（*1）です。一般的な、薄いタイルとは少しイメージが異なるかもしれません。

タイル貼りの建物は、コンクリートの壁が完成した後に接着剤としてのモルタルを塗り、薄いタイルを貼るのが一般的ですが、炆器質の分厚いタイルを安全に保持するために、前川國男はタイルをコンクリートと一緒に固めてしまうことを思いつきました。それが「打込みタイル」という工法（*2）です。

①コンクリートを流し込む（「打込む」といいます）木のできた型枠の内側に、棧木（さんぎ）をつけ、棧木の上にタイルを載せ、並べていきます。

②タイルに空いている小さい穴（タイルの溝の部分にあります）に釘を打ち、タイルを棧木と型枠に留めつけます。小さな穴は、このために最初からあけられています。

③タイルにあいている大きな穴（小さい方のタイルの真ん中にあります）と木の型枠を貫通させて、コンクリートを打込んでも重さで型枠が膨らまないように固定します。大きな穴は、このために最初からあけられています。

④打放しコンクリートを作る時と同じように、木の型枠の中にコンクリートを打込みます。この時のコンクリートはドロドロの状態です。

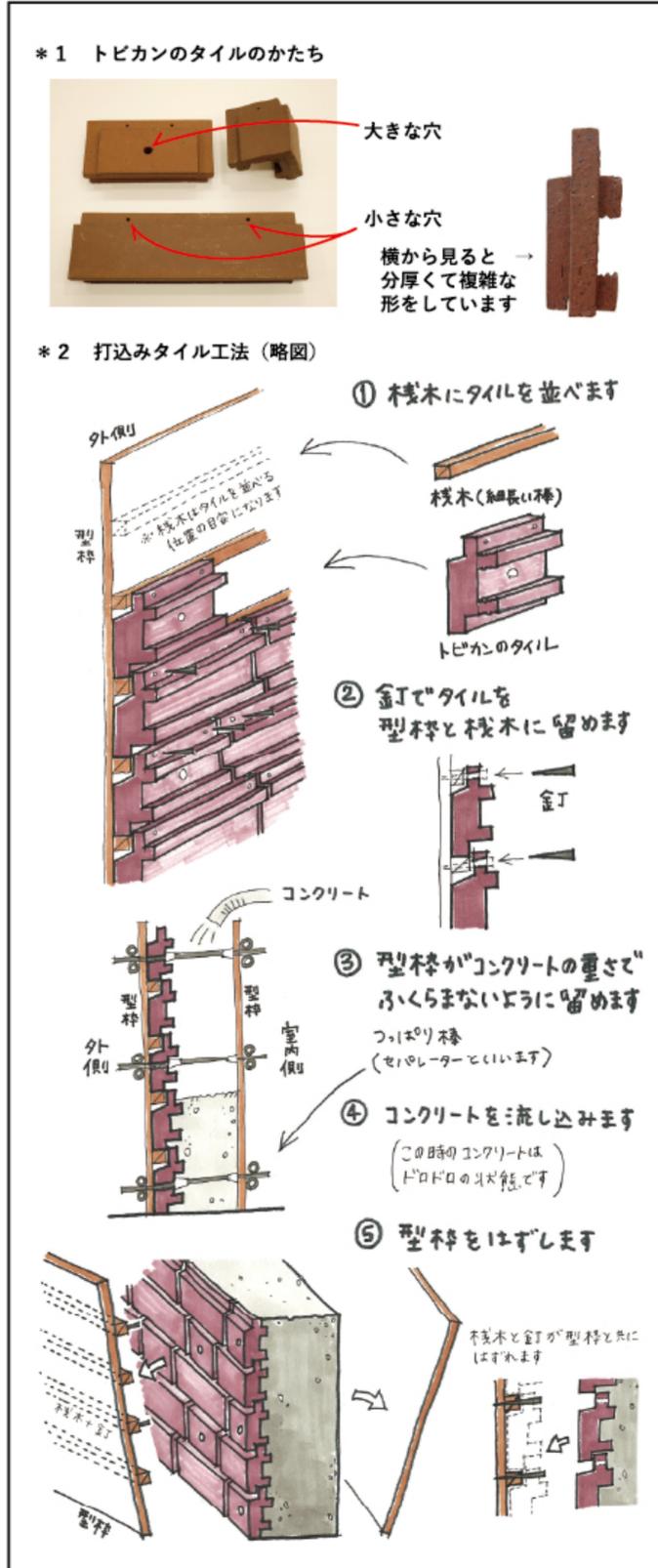
⑤コンクリートが固まってから、木の型枠を外し、②で留めつけた釘を取り除くと打込みタイルの壁が完成です。

タイルにあけられた穴は、前川独自の打込みタイル工法の特徴的で意味のある穴です。

釘を打込むためにあけられた、小さな穴は発見できましたか？

「打込みタイル」工法のタイルは、コンクリートの壁と一体化しているため剥がれ落ちにくいので、安全であると言われています。建築の永久性を追いつけた前川にとって、「打込みタイル」工法は、素材と技術とが結実された、到達点のひとつだと言えます。

2010～2011年の改修では、企画棟と中央棟の一部が作り直されました。その際、新たに8万5000枚ものタイルが使われました。



とびラーが読み解く、知られざる前川國男

育ての親

「建築家は生みの親であると同時に育ての親でなくては行けない。」と、造り直しにはなかったようだ。

くいしん坊

まずは量、美味しいまずいはその後というルールで、銀座の高級寿司店などで部下に振る舞うのが好きだった。

鼻歌はアリア

製図室で部下に囲まれご機嫌でオペラを口ずさみながら、図面に鉛筆を走らせたことも。



坊ちゃん

「先生は明治の男。しつけ良く育てられた“いいこの坊ちゃん”」と言われたとか。

大将と呼ばれた男

人としての大きさと温かさから、部下たちの中で敬意を込めてつけられた愛称は「大将(たいしょう)」。

愛車は白いジャガー

ヨーロッパで一目惚れ。ドライブ旅行でアルプス越え。後日、日本へお持ち帰り～。

色へのこだわり

「建築家にならなかつたら、ペンキ屋さんになりたかった」と言っていたほど、色にこだわりがある。

前川國男の“ブラボー”な人生



1905年

新潟市に生まれ、東京本郷界隈に育つ。父・前川貫一は内務省土木技師。6歳下の末弟・春雄は後の日銀総裁。



1928年

東京帝国大学工学部建築学科卒業。卒業したその日に出発。シベリア鉄道に乗ってパリへ。ル・コルブジエの事務所に入所。

1975年

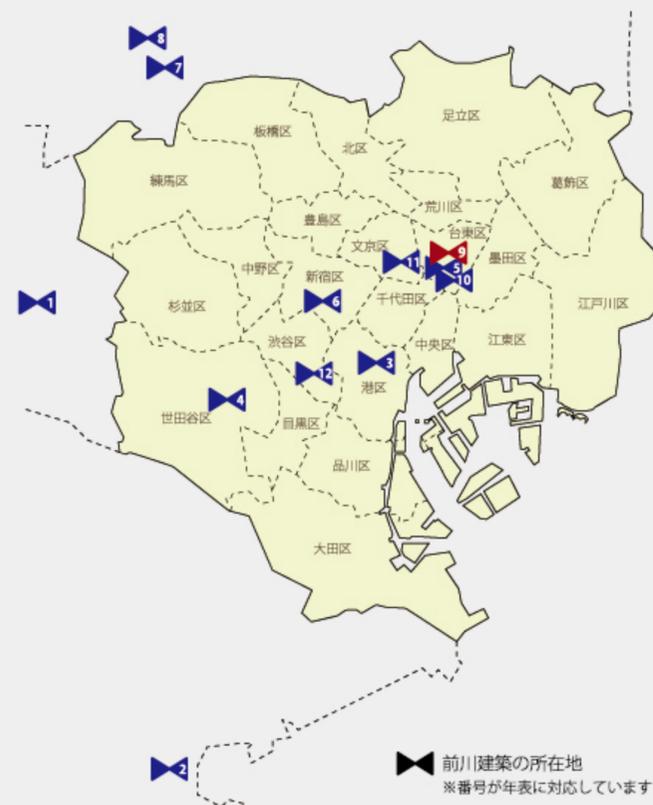


東京都美術館(台東区)完成。前川建築のみどころ満載の美術館。

今すぐ行ける! マエカワ・ケンチク

前川國男はトビカン以外にも多くの建築作品を残しており、一部はリニューアルされ、今なお多くの人々に愛され、使われています。ここでは、トビカン周辺に現存する前川建築を紹介します。(☞付は、一部リニューアル)

建築は長持ちしないと
いけないもんだよ。
100年は持たせないといけない。



- 1 1942年 自邸 (小金井市、江戸東京たてもの園に移築)
- 2 1954年 神奈川県立図書館・音楽堂 (横浜市西区) ☞
- 3 1955年 国際文化会館 (港区) ☞
共同設計: 坂倉準三・吉村順三
- 4 1959年 世田谷区民会館・公会堂 (世田谷区) ☞
- 5 1961年 東京文化会館 (台東区) ☞
- 6 1964年 紀伊國屋ビル ☞
(新宿区、現・紀伊國屋新宿本店)
- 7 1966年 埼玉会館 (さいたま市浦和区) ☞
- 8 1971年 埼玉県立博物館 ☞
(さいたま市大宮区、現・埼玉県立歴史と民俗の博物館)
- 9 1975年 東京都美術館 (台東区) ☞ 2012年
リニューアル!
- 10 1979年 国立西洋美術館新館
(台東区、本館は鈴木・コルブジエの設計)
- 11 1986年 東京大学山上会館 (文京区)
- 12 1985年 前川家墓 (渋谷区千駄ヶ谷、仙壽院)
翌86年6月26日死去、享年81歳

☞ 前川建築の所在地
※番号が年表に対応しています